

中国民族学の 歴史と 今後の展望

祁
慶富

一 中国の民族状況

中国は、長い歴史をもった古い文明国であり、世界で最も人口の多い国でもある。秦、漢以来、中国は統一された多民族の国家として世界にその名を知られており、今日の中華民族には、漢族は勿論のこと、少数民族も含まれる。漢族は、古い民族であり、その形成と発展の過程の中で、他の民族を大量に吸収してきた。血縁関係から分析すれば、漢族は最も「純粹」でない。中国の指導者、故周恩来はかつて分かりやすい表現でこう言った。「漢族は最大の雑種民族である」と。中国の少数民族も皆長い歴史を持つており、程度の差はあるが、それぞれが発展の過程で、漢族やその他の少数民族を吸収してきた。「我のうちに汝あり。汝のうちに我あり」。これが、中国の各民族の血縁的つながりの顕著な特徴である。「少数民族」という語の由来は、これらの民族の人口が漢族と比べて比較的少ないことから来ている。

中華人民共和国建国後、国家による正式の「民族識別」により、現在までに五六の民族が確認されており、漢族以外に五五の少数民族がある。一九九〇年の第四回全国人口調査によると、全国の総人口は一一億七千万人（台湾省、香港、アモイを除く）、そのうち、漢族は一〇億四二八〇

万人、その他の五五の民族の人口が総計で九二二〇万人で、全国総人口の八・〇四%を占める（一九八二年の第三回人口調査では、少数民族の人口は六七三万人、全国総人口の六六・七%であった）。少数民族では、チワン（壮）族の人口が最も多く、一三三八万人。ロツパ（珞巴）族が最も少なく、二二二二人である。

中国の少数民族は人口こそ少ないが、中国の国土に占める分布面積は広く、総面積の六四・三%を占めている。中国の少数民族の分布の特徴は、同一民族の小集落が広範囲に散在して、他の民族の集落と混在しているという「大雑居、小聚居」である。大多数の少数民族は、同じ民族が比較的集中して住んでいるコミュニティ（聚居区）を持っており、これを基盤として、自治区、自治州、自治県（旗）、自治郷を設立した。現在、内モンゴル、新疆ウイグル、チベット、広西チワン族、寧夏回族など併せて五つの自治区、及び三〇の自治州、一二四の自治県（旗）がある。しかし、集中して住んでいるといっても、これは相対的にそう言えるだけで、やはり広範囲分散形態（大雑居）が基本である。全国どの省、市、自治区、及び県の住民を見ても、単一の民族で構成されているところはない。全国各地に分散している少数民族もあれば、一部が集中し、残りが他の民族と雑居しているという民族もある。

居住地域で分類すると、中国では元来、東北内モンゴル

地区民族、西北地区民族、西南地区民族、中東南地区民族という括り方があった。遼寧、吉林、黒龍江三省と内モンゴル自治区東北部には、主に満、朝鮮、オロチヨン（鄂倫春）、エヴェンキ（鄂温克）、ダフル（達斡爾）、ホジェン（赫哲）族などが居住している。広大な内モンゴル草原はモンゴル族の故郷である。新疆ウイグル自治区には、ウイグル（維吾爾）、カザフ（哈薩克）、キルギス（柯爾克孜）、シボ（錫伯）、タジク（塔吉克）、ウズベク（烏孜別克）、タタール（塔塔爾）、ロシア（俄羅斯）族などがある。回族は全国各地に分散しているが、主な集中居住地域は、寧夏回族自治区である。甘肅、寧夏、青海の三省と自治区には、トンシヤン（東郷）、トゥー（土）、サラ（撒拉）、ボウナン（保安）、ユーク（裕固）族などが居住している。

青蔵高原で人口が最も多いのは、チベット（蔵）族で、メンバ（門巴）やロツパ族はチベット自治区の南部に居住している。雲南、貴州、四川の三省は、居住する民族の種類が最も多い地域で、イ（彝）、ペー（白）、ハニ（哈尼）、タイ（傣）、リス（傈僳）、ラフ（拉祜）、チンポー（景頗）、アチャン（阿昌）、プミ（普米）、ヌー（怒）、ジノー（基諾）、トゥールン（獨龍）、チャン（羌）、ワ（瓦）、プーラン（布朗）、ドゥアン（德昂）、ミャオ（苗）、ブイ（布依）、トン（侗）、シユイ（水）、ムーラオ（仫佬）族などが住んでいる。広西チワン族自治区で人口が最も多い少数民族は、チワ

ン族で、他にヤオ（瑤）、ムーラオ、マオナン（毛南）、キン（京）族などもここにコミュニティを持っている。トゥチャ（土家）族は、主に湖北、湖南、四川に居住している。リー（黎）族は海南島の主要な少数民族である。シヨオ（畲）族は、東南沿海部の福建、浙江などの省に散らばって住んでいる。高山族は、主に台湾省に居住している。

総じて言えば、中国の少数民族の居住地域は、大むね「U」字形を呈している。つまり、東北内モンゴルから新疆、チベットに至り、更に雲南、貴州、四川、広西、広東、海南、浙江、福建、そして台湾省に至っている。西部地区が主要部分であり、西北、西南に重心がある。

中華人民共和国建国前、歴史上の複雑な要因により、各民族の経済発展の度合は大変不均衡で、社会構造は大きく異なっていた。同じ民族でも住む地域によって、大きな違いがある。

二十世紀の五〇年代、チワン、回、ウイグル、朝鮮、満、ブイ、ベリ、トゥチャ、トン族などに加え、モンゴル、イ、リー族などの大部分は漢族とほぼ同じであった。封建領主制（農奴制）段階にある民族もあった。主にチベット族、タイ族と一部のハニ族、ウイグル族がそうであった。内モンゴル遊牧地区には、まだ部分的に封建牧奴制が残っていた。イ族は、大部分が封建地主経済の段階に入っていたが、四川や雲南地区ではまだ奴隷制が残存していた。つまり、

有名な「凉山彝族奴隷制」である。更に、依然として濃厚な原始共同体の残滓を留めている民族もあった。雲南のトゥールン、ヌー、リス、プーラン、ジノー、チンポー、ラフ、ドゥアン、ハニ、ワ族など、チベットのロツパ族、内モンゴル東北のオロチョン、エヴェンキ族、海南島のリー族、台湾の高山族などがそうであった。

中国の各民族の文化は豊かで多様であり、共通性を持ちながらも、各民族の独自性を備えている。言語体系から見ると、大部分が漢・チベット語系（漢語族、チベット・ミヤンマー語族、チワン・トン語族、ミャオ・ヤオ語族が含まれる）か、アルタイ語系（満・ツングース語族、モンゴル語族、チュルク語族が含まれる）に属する。この他に、南アジア語系やインド・ヨーロッパ語系、マライポリネシア語系の言語を話す民族もある。

今世紀五〇年代以前にすでに通行していた民族文字には、チベット文字（七世紀に考案）、ウイグル文字（十一世紀に採用したアラビア文字形式の文字）、モンゴル文字（十三世紀に考案）、タイ文字（十三世紀に考案）、ハンゲル（十五世紀に考案）、満文字（一五九九年に考案）、イ文字（最古の碑文は十五世紀）、カザフ文字（十九世紀後半に採用されたアラビア文字形式の文字）、シボ文字（一九四七年、満文字に手を加えて考案）、チンポー文字（十九世紀末に考案）、ミャオ族のプラト文字（二十世紀初頭に

イギリス伝教士である Pollard, Samuel とマヤオ族の楊雅各らによつて考案され、布教に使われた)、ナシ族のトンバ文字とコバ文字(主に宗教に用いる)、旧リス文字(宗教用)、ラフ文字、キルギス文字、タタール文字、ウズベク文字、キリル文字、方形チワン文字、方形ペー文字、シユイ族の水書など二一民族の二八種の文字がある。そのうち、現在まで使用されているのは、一二民族の一七種の文字である。これらの文字は、表音文字もあれば、音節文字や象形文字もある。

中国少数民族の信仰も多種多様である。西南地区と東北地区の多くの民族は、自然崇拜と祖先崇拜を主な内容とする原始的信仰を保持している。一部の南方少数民族は、漢族の道教を採り入れ、道教で崇拜されている神靈を自民族の神靈体系の中に吸収した。近代になると、西洋の植民主義者の侵入に伴い、カトリックとプロテスタントが西南や東南、東北の辺境地帯の少数民族に一定の影響を持った。中国の少数民族に最大の影響力を持つのは、仏教とイスラム教である。仏教は、四世紀にチベットに伝わった後、現地の土俗信仰と融合してチベット仏教(通称ラマ教)となった。小乗仏教は、紀元前一世紀に東南アジアを経由して雲南に伝わり、タイ、アチャン、ドウアン、プーラン、ワ族などに信仰されるようになった。イスラム教は、七世紀半ばに中国へ伝わり、主に回、ウイグル、カザフ、トン

シャン、キルギス、サラ、タジク、ウズベク、ボウナン、タタール族など十の民族に信仰されている。中国の少数民族はそれぞれ特色を持った伝統文化を保持しており、衣食住、社会組織、通過儀礼、婚姻・家族制度、風俗習慣、民間伝承、建築工芸、伝統行事……など、どれもが民族学の調査研究の宝庫である。

中国政府が実施しているのは、民族の平等と団結の政策である。国内の民族問題を解決する基本政策は、「民族区域自治」である。つまり、国家最高機関の一元的指導の下、少数民族はそれぞれの集中居住地域で自治機関を設立し、民族内部の事柄を管理する権利を行使する。一九八四年に公布された「中華人民共和國民族区域自治法」が、憲法が規定する民族区域自治制度を実施するに当たつての基本法である。目下、少数民族の地方自治体としては、自治区が五、自治州が三〇、自治県(旗)が一二四ある。

民族問題は、中国では非常に重視されており、全国人民代表大会常務委員会の下に専門の民族事業委員会が設置されており、国務院の下には国家民族事務委員会がある。民族研究は中国の学界の重要な領域であり、一連の研究機構と多くの学術団体、更には様々な民族の成員からなる、層の厚い研究者たちを擁している。民族研究には、民族学、民族史、民族言語及び民族理論、民族経済、民族文学、民族芸術など多くの分野があり、総称して民族学科という。民族

学は中国の民族研究の中で、特別な重要性を持っている。

二 一九四九年以前の中国民族学

——その萌芽と基礎固め

中国のように多民族の国家では、民族、特に少数民族を対象とする研究は、長い歴史を持っている。中国の少数民族の社会生活を初めて系統的に記述したのは、漢代の歴史家司馬遷である。司馬遷は、「列伝」の形式で当時の匈奴や大宛、朝鮮、南越、東越、西南夷について記録し、貴重な歴史民族学資料を残した。これ以後、歴代の史書、地方志、旅行記、筆記などの著作中に、古代の民族に関する記載が大量に残されている。

中国の歴史文献中には、歴史民族学の資料が残されているが、民族学が一つの学問領域として登場してからの歴史はまだ浅い。民族学は近現代に西側から伝わってきたもので、「舶来品」といえる。清朝末期、西側学術思想の伝来に伴い、西側の民族学も次第に紹介されるようになった。

民族学の中国での最初の訳語は「民種學」で、一九〇三年（光緒二十九年）、北京大学堂書局が林紘、魏易共訳の「民種學」(Ethnology)を出版した。原書はドイツの Michael Haberland の著作であった。一九〇四年、梁啓超主宰の「新民叢報」が蔣智由の「中国人種学考」を掲載し、民族学を

「人種学」と呼んだ。

中国で正式に「人類学」の名称が使われたのは一九一六年で、孫学悟が「科學」雜誌第二卷第四期に「人類学概論」を発表した後、陳映隴が「人類学」を出版し、李濟が米國ハーバード大学人類学科で「中華民族の形成」と題する博士論文を提出した。こうして、民族学が、学界の注意を引くようになった。「民族学」の語が正式に使われたのは、蔡元培の「民族学について」が一九二六年「一般雜誌」第一卷第四期に発表されたのが最初である。この後、蔡は「社会学と民族学の關係」(「社会学刊」一九三〇年第一卷第四期掲載)や「民族学上の進化観」(「新社会科学季刊」一九三五年第一卷第四期掲載)を著わした。

蔡元培は、西側の民族学を中国に導入した創始者であるといなされている。蔡は、一九〇七年にドイツに留学し、ライプツヒで三年間、民族学を研究している。帰国後、北京大学学長の在任中に人類学講座を設けている。一九二八年、中央研究院院長に就任し、人類学と民族学の発展のために尽力した。また、社会科学研究所に民族学チームを増設し、自ら主任を兼務した。蔡元培は、フィールドワークを非常に重視し、毎年研究員を各地に派遣して、計画的調査を実施した。例えば、一九二八年には顔復礼・商承祖が広西凌雲でヤオ族を調査し、一九二九年には、林惠祥が台湾で高山族を調査し、一九三〇年には凌純声・商承祖が東

北松花江下流域でホジエン族を調査し、一九三二年には凌純声・芮逸夫・勇士衡が湘西でミャオ族を調査し、一九三三年には凌純声・芮逸夫・勇士衡が浙江でシヨオ族を調査し、また同済大学の史図博と山東大学の劉咸に協力して、海南島でリー族の調査にも当たっている。一九三四年には凌純声と陶雲達が雲南でイ族を調査している。

この時期、西側の人類学や民族学の著作も続々と翻訳紹介された。この中国民族学の萌芽期には、研究者の多くが、西側に留学して民族学の専門的訓練を受けていた。進化人類学派の中国への伝来は、社会学学説の伝来と切り離せない関係がある。タイラーの『人類学』、モーガンの『古代社会』などがこぞって翻訳出版された。中国におけるドイッ・オーストリア民族学派（伝播学派）の代表的人物は陶雲達で、雲南の擺夷（タイ族）の調査で知られている。アメリカ文化歴史学派に属する研究者には、戴裔煊、吳澤霖らがいる。フランス社会学派の研究者には、楊堃、凌純声、楊成志、徐益棠、衛惠林、芮逸夫らがいる。

西側の民族学で、中国で最も影響力を持ったのは機能学派で、その中心は燕京大学社会学科であった。その学説を最初に中国に紹介したのは、呉文藻らである。一九三五年、イギリス機能学派の代表的人物の一人、ブラウンが訪中し、講義を行った。一九三六年、呉文藻はロンドンでイギリス機能学派の創始者、マリノフスキーと密接に連絡をとり、

間もなく、呉文藻の弟子である費孝通によって、まだ未発表であったマリノフスキーの『文化論』が中国語訳され、発表された。

燕京大学は、かつて中国民族学の人材養成の揺り籠であり、費孝通（現在、中国全国人民代表大会常務委員会副委員長、中央民族大学名誉学長、北京大学名誉教授）の他に、林耀華（現在、中国民族学会顧問、中央民族大学名誉教授）、瞿同祖、李安宅など多くの民族学者、社会学者を育てた。三〇、四〇年代中国の機能学派は、多くのフィールドワークを行った。費孝通の『江村経済』『花藍やオ族社会組織』や、林耀華の『金翅』『凉山夷家』などは、みなフィールドワークの名著である。田汝康の雲南タイ族の調査や、李安宅のラマ教制度の調査も注目すべき成果である。この他に、民族学研究において影響力があった人物としては、潘光旦（故中央民族大学教授）らがいる。

中国初の民族学学术団体、中国民族学会は一九三四年に設立された。民族学の教育課程や研究者は、燕京、清華、中山、雲南、四川大学などに分散していた。社会学科や辺政学科を設けている大学もあったが、この時期には専門的な民族学科や人類学科はまだなかった。抗日戦争の勃発により、中国民族学の発展は多大な影響を受けた。「辺境学」や「辺政学」は、実際には民族学の代名詞であった。調査・研究の展開と民族学研究機構の出現に伴い、民族を主な対

象とする学術雑誌も相繼いで刊行された。主なものに、『民族学研究集刊』『民俗』『禹貢』『辺政公論』『人類学集刊』などがある。

一九四九年以前の中国民族学は、萌芽段階に過ぎないものではあったが、その後の中国民族学の発展の基礎を築いた。民族学の中国での伝播は、その最初の段階から社会学と密接な関係があった。これは、中国民族学の第一の特徴である。名称についてみると、「人類学」と呼ぶこともあるが、「民族学」の方がより普及している。これが、第二の特徴である。第三は、中国民族学の研究は、西側の様々な学派の理論や方法を取り入れる一方、中国伝統の史学の方法をも排斥しない点である。特に、民族の起源や民族文化の研究においては、歴史文献を重視している。翦伯贊、翁独健、呂振羽、顧頡剛、馮家昇、方國瑜、馬長寿、白寿彝などの著名な歴史家たちには、民族の歴史、文化、風俗などについて深い研究と重要な成果がある。第四は、中国民族学はその出発点から、調査・研究の対象を中国辺境の少数民族に絞っている。これは、民族学の中国化にとって確かに正しい選択であったが、制約された条件のために、世界の民族の調査や比較研究に注意を向けなかったのは、大きな弱点でもある。中国民族学の先駆者たちの多くは、確かな専門知識を身に付けており、中国の民族調査の歴史を切り開いたが、完成された民族学の理論や体系は、この

段階では形成されなかった。

三 五〇、六〇年代のマルクス主義民族学 —— 転換と調査

一九四九年の中華人民共和國建國後、民族学は巨大な歴史の転換期を経験することとなる。マルクス主義を指導原理とすることが、民族学研究の基本原則であり、マルクス主義の唯物史観の適用が、至上スローガンとなった。具体的に言うと、つまり、原始社会——奴隸社会——封建社会——資本主義社会——社会主義社会という「五つの生産方式」理論で民族を研究するのである。この理論は、所謂「社会発展史」学説であり、アメリカの初期進化学派、モーガンの『古代社会』に根拠を見出すことができる。こうして、モーガンは唯一肯定された西側の民族学者となった。マルクスの『古代社会ノート』とエンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』が民族学研究の經典となり、スターリンの民族の定義に関する言説が民族分析の基準となった。『民族問題とレーニン主義』中の一文によれば、「民族とは、人々が歴史的に形成してきた、共通の言語、共通の居住地域、共通の経済生活、及び共通の民族文化の特徴の上に現われる共通の心理傾向という四つの基本特徴を持った安定した共同体である」。これが、中国でよく知られて

いる所謂民族の「四つの基本特徴」である。

この時期は、西側の民族学を批判し、ソ連の民族学を学習する時期であった。五〇年代、中国民族学の国外研究者との接触は、ソ連を除けば完全な断絶状態であった。六〇年代には中ソ関係が悪化し、ソ連民族学界との関係は全く中断してしまったものの、この時期の中国民族学におけるソ連民族学の影響は非常に大きなものであった。特に、原始社会史が民族学の重要な構成部分となったことは、ソ連民族学の貢献とみなされている。

よって、この時期の中国民族学の研究の重点は、中国少数民族社会の性質問題であった。この時期の中国民族学は政治の影響を強く受けており、「民族地区事業に貢献しよう」が遵守すべき実践方針であった。この時期は教条主義の制約があったものの、民族研究は国家と政府の指導と支持を得て、他の国では到底実現できないような大きな規模で、組織的な長期調査を行い、空前の大成果を上げた。五〇、六〇年代の中国民族学は、その他の学問領域と協力して、主に以下の三大任務を成し遂げた。

(一) 民族識別

民族識別というのは、一つの民族の成員と名称を判別することである。中国は歴史的に多民族国家であり、各民族は長い歴史の経過の中で大きな変遷を経て、幾つにも枝別

れし、それぞれに名称が異なるという複雑な状況を呈していた。中華人民共和国建国当初、民族の名称は非常に多く、一つの民族に複数の他称や自称があったり、異なる民族が同じ名称を持っていたりした。一九五三年当時、全国統計した民族名称は四〇〇余にも達し、雲南省だけでも二六〇余りになった。この大量の民族名称は、突き詰めれば、基本的に二組に大別出来た。まず、識別対象の共同体は漢族なのか、少数民族なのか。次に、少数民族だとすれば、単一の民族なのか、それともある民族の一部分なのか。一九五〇年から、中国政府は民族識別作業を民族事業の一貫として具体化し、中央政府及び関連する民族事業機関が専門家、研究者、民族行政スタッフからなる科学研究チームを組織し、各地方が提出した民族集団に対し、大がかりな調査を行った。フィールドワーク結果と総合的検討の上に、客観的な民族特徴と当事者側の主観的な民族意識とに基づいて民族を確定した。

大規模な民族識別作業は、一九五三年に始まり、一九五四年には、既に公認されていたモンゴル、回、チベット、ウイグル、ミャオ、ヤオ、イ、朝鮮、満族などの他に、識別と再分類の作業を経て、更にチワン、トン、ペー、タイ族など二九の少数民族を確認した。一九六四年までには、相前後してシユオ、トゥチャ、ダフル族など一五の民族を単一民族として確認した。一九六五年には、ロツパ族を、

一九七九年には更にジノ族を単一民族として確認した。こうして、現在、中国には識別作業を経て確認された少数民族が計五五いる。中国の民族識別は、民族研究の科学性を体现したものであり、中国民族学研究が成し遂げた一大壮挙である。このため、国際民族学界の広範な注目を集め、かなり高い評価を得た。

(二) 大規模な社会歴史調査

中華人民共和国建国以後の社会的政治的経済的激変に伴い、間もなく少数民族の実態には史上前例のない大変化が起り始めた。失われつつある、社会発展及び少数民族社会の性質の理解・研究に役立つ貴重な資料を救い、保全するために、中国の指導者毛沢東は「遅れた者を救え」という指示を発し、大規模な少数民族社会歴史調査を展開した。

一九五六年春、全国人民代表大会民族委员会の直接指導の下、中央政府民族事業委员会の協力を受け、中央や関係する省及び自治区から、民族学、社会学、歴史学、考古学、地理学、経済学などの専門家及び民族行政スタッフ計二〇〇人余りを動員し、内モンゴル、新疆、チベット、雲南、貴州、四川、広東、広西など八調査チームを結成、二十数カ所の少数民族地区で調査を行い、約一五〇〇万字にも上る第一次資料をまとめ上げた。

一九五八年には、調査事業は中国科学院民族研究所の管

轄となり、調査チームは始めの八から一六に増加され、甘肅、青海、寧夏、遼寧、吉林、黒龍江、湖南、福建などの八チームが新設された。調査メンバーには、中国科学院の民族、歴史、経済、考古などの研究所と文化部など関係部門の人員に加え、中央民族学院、中国人民大学、北京大学、北京师范大学などの教員や学生が含まれていた。調査メンバーは最高時には千人以上にも達した。

一九六四年、八年に及んだ少数民族社会歴史調査は基本的に終了した。調査の結果、全国の少数民族の社会歴史状況が、民族の起源や生産力、生産関係の発展状況、社会政治構造、意識形態、伝統文化、風俗習慣、宗教信仰などを含め、基本的に明らかになった。記録された資料は、三四〇種余り、二九〇〇万字余り。整理された檔案と文献資料は百数種、計一五〇〇万字余りになった。更に、貴重な映像を科学記録フィルムと写真に収め、少数民族文物を大量に収集した。

この調査は、中国の民族学調査に実に貴重な研究資料を蓄積した。しかし、指摘しておかなければならないのは、当時の国内政治状況の影響のため、この調査には教条主義の傾向が強かった点である。調査内容は生産力と生産関係に片寄り、民族の伝統文化や風俗習慣にはあまり注意を向けなかったことが惜しまれる。社会歴史調査と平行して、かなり全面的な少数民族言語調査も行われた。この大規模

な社会歴史調査は、民族学界のみで単独に行ったのではなく、「民族研究」の旗印の下、その他の民族研究に関連する学問領域と共同で成し遂げたものである。しかし、民族学が調査の主力であったことは、言うまでもない。

(三) 少数民族社会の性質の研究

五〇、六〇年代の中国民族学研究の中心課題は、中国少数民族社会の性質の問題であった。調査・研究の結果、中国の少数民族にみられる様々な社会形態が解析された。中華人民共和国が建国された時、少数民族社会の古い制度は、まだ外部の手が入っていないかった。三五〇〇万の少数民族人口には、散在している六〇〇万人余りを除くと、概ね以下の四つの状況があった。

- ① ほぼ二三〇〇万人が、漢族と同じか基本的に似通った社会構造の中で暮らしていた。そのうち、一三〇〇万人が封建地主経済が支配的な地域におり、一〇〇〇万人が領主制から地主制に移行したばかりで、地主経済がまだ未発達段階にある地域で暮らしていた。
- ② 約四〇〇〇万人が封建農奴制を残した地域にいた。
- ③ 約一〇〇〇万人が奴隸制を残した地域にいた。
- ④ 約七〇〇万人が原始共同体末期の社会に住んでいた。

少数民族社会の性質に関する研究成果は、国家の少数民族

地区政策の策定の拠り所となり、社会の性質に合わせて異なった方法で民主化の改革が行なわれた。

五〇、六〇年代の中国民族学は、積極的に中国の少数民族地区の変革のために調査研究を行い、非常に強い政治性を持っていた。しかし、当時の政治状況においては、民族学は西側ブルジョワジーのために奉仕する学問だという既成観念が根強く、民族学研究の方法論は、西側民族学からマルクス主義民族学に転換したものの、民族学は依然として批判の対象とされる苦境にあった。

一九五七年の「反右派」期には、社会学に真っ先に矛先が向けられ、「ブルジョワ学問」のレッテルを張られて、「社会学」という名称は消滅してしまった。著名な社会学者で民族学者でもある人々が、悪名高き「大右派」になってしまい、民族学も存亡の危機に直面した。当時、ソ連の民族学が隆盛期にあったため、民族学の方は完全な消滅の目には会わなかったものの、その後の中ソ関係の悪化に伴い、民族学の名称は実際には使用不可能であった。この時期、民族学の研究は民族研究、民族理論、民族史、民族事業の名目で行うしかなかった。

一九六六年から一九七六年までの十年の「文化大革命」期、民族学研究は完全に停止状態に陥った。七〇年代以前の新中国の民族学は苦難に満ちていたが、民族学研究者たちはしたたかで粘り強く、困難な状況の下でも中国少数民族民

族の調査研究を放棄しなかった。実際に基づいて公正に評価すれば、五〇、六〇年代の大規模な社会歴史調査は、史上前例のない巨大プロジェクトであり、政治的な制約のために学術性が影響を受けてはいるものの、調査で得られた第一次資料は信頼性が高く、貴重な科学的価値のあるものである。国策であったために、十分な人手、物資、資金及び各種の条件を得られ、これだけの規模のフィールドワークを成し遂げることができたのである。五〇、六〇年代の中国民族学調査が蓄積した資料が、中国民族学が今日再び発展・繁栄するための堅固な土台を築いたのである。

四 改革開放以後の中国民族学

——その危機と創造

一九七八年以来、中国は全面的な改革開放政策を実施しており、中国民族学は復活を果たし、再建・発展の新段階に入った。中国の特色を持った民族学の建設が、中国民族学の目下の課題である。改革開放後、社会学者は思想の解放を得て、従来の数々の「タブー」を突破できるようになった。民族学は一つの学問領域として、国家と社会の承認を得、確固たる地位を占めるようになった。民族学研究は国内で勢いよく発展し始めたばかりでなく、鎖国状態に終止符を打ち、国外の研究者たちとの学術交流も日増しに

頻繁になり、国外の研究動向が中国民族学にも多方面の影響を持つようになった。

中国民族学には新局面が訪れた訳であるが、計画経済から市場経済への急激な移行に直面しているため、商品経済の荒波が少数民族民族地区に押し寄せており、中国少数民族文化の変質は避けられない状況にある。このため、中国民族学研究の対象と内容も新たに変化せざるを得ない。同時に、旧来の理論や方法及び研究手法では、新たな状況に対応できず、研究のための経済的物質的条件にも困難が出てきた。このように、中国民族学はある種の「危機」に直面している。伝統を継承し、大胆に創造する。これが、中国の特色を持った民族学を建設するための唯一の道である。八〇年代以来、中国民族学は回復・発展の過程で絶えず模索と創造を続け、自らの新しい体系を打ち建てつつある。

(一) 民族学の学界における地位と名称

民族学は、中国では歴史が浅いものの、すでに七〇年が経過しており、改革開放後に生まれたような新学問ではない。しかし、五〇年代から七〇年代にかけては、民族学は政治的原因から非常に地位が低く、このため一九七八年に出版された權威ある辞書『辞海』『民族分冊』には、まだ「民族学」の部門は設けられていなかった。しかし、このような事態は急速に改められ、一九八六年に改訂された『辞海』

「民族分冊」では、「民族学」の部門が補足されただけでなく、部門別索引において「民族学」は単独で一部門をなすまでになった。八〇年代に編纂された『中国大百科全書』では、民族学は「民族」巻に収められており、重要部門となっている。この部門は林耀華が主編を担当している。また、更に世界民族部門があり、費孝通が主編を務めている。八〇年代以降に中国で出版された学問領域に関する辞書は全て、民族学を独立した一領域として扱っている。目下、中国國務院と国家教育委員会が設置した専門教學課程委員会は民族学を正式に一級学科とし、法学や政治学、社会学と同じ「法学部門」に分類し、修士号と博士号の授与権を認めることにしている。

現在、民族学は一つの学問領域として、すでに社会の公認を得ている。中国の民族学は、諸外国で用いられている「文化人類学」とは同じである。現在、中国でも「文化人類学」の呼称を用いた研究機構や教學課程があるが、「民族学と本質的には何ら相違はない。中国は多民族国家であるため、民族学の呼称を用いた方が、より中国の特徴と習慣にあっている。特に、中華人民共和国の全国人民代表大會常務委員会の下には民族委員会があり、國務院の下には国家民族事業委員会があり、地方の行政機構の各レベルにもそれぞれに相應の民族事業を管轄する機構がある。こういう点を踏まえると、民族学の呼称を用いた方が、中国の

国情に合っているように思われる。民族学の名称を「文化人類学」に代えようとするのは、中国では理にかなっていない。民族学の名の下に、文化人類学の研究や国際交流を行うほかないであろう。

(二) 學術団体と教學・科学研究機構

改革開放以降、民族学の専門的學術団体や教學・研究機構が一挙に現われた。これは、中国民族学の体系が形成されたことを示す重要な指標である。

一九八〇年、全国レベルの學術団体、中国民族学会が正式に成立した。現在、全国各民族の会員は約千名に上り、一九九三年までに既に六回の學術會議を開催した。現会長は、宋蜀華で、中央民族大学の終身教授である。費孝通、林耀華など國際的に著名な民族学者が招請を受けて学会顧問を務めている。

民族学研究機構の中で最も重要なのは、中国社会科学院民族研究所民族学研究室（一九七七年）と中央民族大学民族学研究院（一九九五年）である。中国社会科学院民族研究所の民族学研究室が、中国民族学研究会事務所の所在地である。中央民族大学民族学研究院は、中国で初めて研究院の名を冠した民族学研究机构兼教學機構であり、傘下には民族研究所、民族理論研究所、チベット学研究所、岩絵研究センター、民族文物博物館及び民族学科やチベット学

科といった教学課程がある。内モンゴル、新疆、広西、寧夏、チベット自治区に加え、一部の多民族省、例えば、黒龍江、吉林、遼寧、甘肅、青海、湖南、四川、貴州、広東省などでは、民族研究所や民族学研究所を設置して、民族学研究を行っている。民族研究所というのは総称であつて、活動内容は民族学研究もあれば、民族の歴史、言語、文学、芸術、経済なども含まれる。中国には全国レベルの民俗学会があり、各地にも専門的な民俗研究機構があるが、その研究課題は民族学と不可分の関係にある。

八〇年代には、専門的な民族学の人材を育成するための学科や専門課程が高等教育機関に相繼いで設けられた。広州の中山大学は、一九八一年に民族学と考古学の二課程を含む人類学科を開設した。一九八三年、中央民族大学は中国初の民族学科を開設し、国家教育委員会から正式に全国重点学科に指定された。ここでは、四年制の学部と修士課程、博士課程を設け、修士号、博士号取得を目指す留学生も受け入れている。その他に、アモイ大学、雲南大学、中南民族学院などの大学も民族学科や専門課程を設けている。

(三) 理論、対象及び方法

民族学再建の過程では、当然、理論や対象及び方法などの面で一連の新たな問題に直面することになった。マルクス主義を指導原理とする原則は依然として堅持するもの

の、教条的、形式的な傾向は大きく改められた。民族学自身の理論については、思考し、模索し、探究することが提唱されている。西側や諸外国の民族学の学説についても、もはや一概に排斥する態度はとらず、大胆に学習し、取り入れるようになり、如何なる学説を導入、運用しても構わない。目下の状況は、『百家争鳴』の局面を呈しているといつてよいであらう。

民族学研究の対象と内容についても、近年大きな変化が起こっている。八〇年代からは、漢族研究が重視され始め、少数民族も研究すれば漢族も研究するというのが新傾向となつている。同時に、ある単一民族、或いは密接な繋がりをもつ幾つかの民族について、全面的且つ掘り下げた研究を行うというのも新たな傾向である。満学、モンゴル学、チベット学、イ学、タイ学などが興っており、専門の研究機構も誕生した。テーマ研究も盛んになり、鬼やらい文化、シャーマン研究、トンパ文化、貝葉文化、チベット仏教などの研究が行われている。

民族学を総合的の学問とみなし、広義の民族学理論を打ち立てようとするのが、中国民族学理論体系における新観点である。その代表としては、施正一主編の『広義民族学』がある。この広義民族学には、理論民族学、人口民族学、言語民族学、経済民族学、文化民族学、文芸民族学、教育民族学、社会民族学、心理民族学、宗教民族学、政治民族

学、法制民族学、歴史民族学、伝統民族学、都市民族学、農村民族学、医薬民族学、映像民族学などが含まれている。

また、近年、都市人類学や応用人類学が注目を集めている。

文化を核として、民族文化の発生と発展、変遷を研究し、民族への文化の影響を探ろうというのが、中国民族学界の一つの主張である。目下、中国では伝統文化は依然として根深く、豊かで多様なさまをみせている。文化の変遷は日々刻々と進行し、絶え間なく姿を変えていく。民族文化は、目下大いに成果が期待される研究領域である。

フィールドワークは、依然として中国民族学の基本となる方法である。比較研究は、少数民族間の比較や、国外の民族との比較が現在行われている。他の学問領域、例えば言語学、考古学、歴史学、地理学、生態学、心理学、宗教学などの成果を十分に学習、吸収して、学際的総合研究を行うことも重視されている。中国の民族学には、西側の研究とは大きく異なる特徴がある。それは、中国民族学研究には幾種類もの文字で記された歴史文献があるという点である。現状分析と歴史的考察を結合させた研究を重んじるというのが、中国民族学の一大特徴である。

(四) 近年の主な研究成果

八〇年代以降の中国民族学の最も重要な成果は、『五種叢書』の刊行である。この五種叢書には、『中国少数民族全一冊』、『中国少数民族簡史叢書』全五五冊、『中国少数民族語言簡志叢書』全五七冊、『中国少数民族自治地方概況叢書』全一〇五冊、『中国少数民族社会歴史調査資料叢刊』全一四八冊が含まれる。これらは、五〇、六〇年代の調査研究の基礎の上に、改めてスタッフを組織し、資料を補い研究を加えて、まとめ上げたものである。全四百数冊、約一千万字にも上る、中国少数民族の状況を全面的に反映した一大プロジェクトである。

ここ数年、高い学術レベルを持った民族学の基礎理論書が相繼いで刊行されている。一例を挙げると、費孝通『人民に向かう人類学』、林耀華主編『民族学通論』、楊堃『民族学概論』、梁釗韜等撰『中国民族学概論』、施正一主編『広義民族学』などがある。他に、庄孔韶氏の『銀翅』などの専著が出版されている。

訳注

〔1〕 漢字を基に考案された文字。方形とは、漢字のような四角のある字形を指す。

〔2〕 一巻一冊。

(邦訳 田宮 昌子)